

「武道の原点を訪ねて」シリーズ その2

ご存知のように、ここ数年、中学校の保健体育において武道必修化が進められています。

なぜ今、武道が必修化されることになったのか、みんなで考えてみませんか？

みなさんのご意見を気軽に投稿してください。→→→ info-sinsa@osa-kendo.or.jp



5. それでは、自然から正しさを得るためには、どのようにしたら良いのでしょうか

「三徳」を学び、それを身に付けるためにはどのような心構えが大切でしょうか。人間は五官でものを見て感じる、あるいは目には見えないものを感じる感性を持っています。五官とは五感をつかさどる目・耳・鼻・舌・皮膚の「感覚器官」のことです。まずこの感覚器官を日常の生活の中で研ぎ澄ますことが大切です。周りの自然の環境を五官が反応するようになってきたら、体で本能的に感じ、普段は見落としそうなことまで感受できるようになって行きます。

これを「知覚」といい、体感が研ぎ澄まされた状態です。知覚が鋭い人のことを「勘が良い」といい、俗にこれを「第六感」といいます。「知覚」が深くなると、細やかなことに気づくようになって行きます。これを「気づき」といいます。トイレに入ればスリッパを揃えたり、ゴミを拾ったり、人が見ていなくても気付いたことに「功德」を施すような行動が自然にできるようになって行きます。

これを「陰徳を積む」といいます。陰徳は人のために功德を施します。これは思い遣りの心につながって「仁の心」となります。陰に隠れた「善の行動」の施しを本来「修行」といって、「徳を積み強い心」を養います。だから剣道では訓練といわずに「修行」といいます。

***例えば、今、アメリカの大リーグで子供たちに一番人気のある大谷翔平選手。子供たちが一番好きなのは「球場に落ちていごみを何気なく拾って後ろポケットに入れる」この仕草だそうです。

大和魂とは武の三徳、智・仁・勇などといわれています。剣道をされている皆さんはご承知のことと思いますが、いにしえから受け継ぎ大切にしてきた「日本人の心」といえます。これを取り戻そうと社会の風潮も教育問題として提唱し、道徳的な観念を見直そうと武道の必修化が義務付けられたのだと思っています。

むかし、武道を通じて教育者を育てる学校がありました。武道専門学校のことですが、ここでは武道のほかに

短歌を詠んだり道歌を謳ったりあるいは漢詩を詠んで文武の両道を目指しました。その本意は短歌・道歌・漢詩を創作することで、日常生活に細心の気配りを持たせ、感性に触れ「気づきを育てる」意図があったと聞いています。

そして、その気づきが深まって行くと、並行して相乗効果が表れます。これが「知覚」です。第六感が研ぎ澄まされる「鋭い勘」となって、相手の心を読み取る「洞察力」を担って行きます。宮本武蔵が目付けで話している「観見の目付け」で「観」の目を養うことにつながってきます。

このような「五官作用を正しく導くため」に幼児教育や胎児教育も大切にされています。「孟母三遷」という言葉がありますが、孟子のために孟子の母がより良い環境を求めて住まいを替えたといわれます。

自然環境が人を作り、いろいろな人から薫陶を受けながら「人が人を作る」これを道学といい、剣道も剣の理法に則った「道学」です。

この理法の理は「ことわり」の意味ですが、その根底は正しさを得るためにあります。理を求めていくことを剣道では「上達」といい「事理一致」を求めます。理を求める「刀法・身法・心法」で英知が養われ、智慧になります。また正しい修行によって悟りに少しでも近づきたいものです。

次号に続く
(かわら版編集 WG)

「かわら版」でもシリーズ化している「道歌」は剣道修業の極意を短歌にしたものです。ここでは宮本武蔵の道歌を紹介します。



風の如く
水の如くに
至りなほ
事に恐るる
宮本武蔵

「この旗の下に」(部旗)シリーズ その2 (近鉄剣道部)

剣道部にはその活動理念を簡潔に語る部旗が掲げられています。これを訪ねる企画のシリーズ第二弾は、昨年創部50周年を迎えた近鉄剣道部。同社剣道部 部長の村上吉昭さんにお話を伺いました

1. 近鉄剣道部について

1972年6月29日、当時の佐伯勇社長臨席のもと、岩佐喜久彌(六高剣道部OB、初代剣道部長)、福持通(八高OB)両先輩の日本剣道形披露で近鉄西大寺スポーツセンター武道場が開かれ、これを契機として近鉄剣道部が活動を始めました。当時も今も剣道部のメンバーは現業勤務が多く、業務の中の寸暇を部活動にあてていますので、一体感を保つことに苦心がありますが、この点で大切な行事を2つご紹介します。

2. 柳生合宿

毎年8月(現在コロナのため休止中)、剣豪の里、柳生芳徳寺に隣接する正木坂剣禅道場で合宿を行っています。道場内で泊まり、朝には芳徳寺橋本紹尚和尚の指導により座禅を行うなど、まさに寝食を共にして剣を修め絆を深めます。



(2019年柳生合宿)

3. 関西私鉄剣道大会

1985年より近鉄、南海、京阪、阪急、JR西日本(第5回より参加)の5社で関西私鉄剣道大会を開催しています。幹事持ち回りの手作り大会ですが、現顧問の近畿日本鉄道都司尚社長も長年にわたり熱心に参画しており、部員一同大いに盛り上がります。

4. 部旗「守破離」について

このような行事の際に掲げる部旗を、2002年創部30周年にあたり新調しようという運びとなり、当時師範をつとめていただいていた横山鐵矢先生にご相談しましたところ、やはり近鉄剣道部員の手になることが望ましいとの先生のお考えのもと、創部メンバーである青木保先輩に「守破離」の揮毫をいただきました。



(2019年第36回関西私鉄剣道大会)

5. 1972年、2022年、未来へ

昨年近鉄剣道部は創部50周年を迎えました。その間に近鉄は純粋持株会社制へ移行し、商号も近鉄グループホールディングス株式会社となり、時代に合わせた変革を続けています。「守破離」は安心を支える「型」を守りながら、殻を破り、新たな価値を作り出すことを教えています。我々近鉄剣道部員は、よき企業人、よき市民、そしてよき家庭人として諸先輩を目標にその伝統をさらに高めてまいります。

むすびに、今回部旗を調べることで改めて近鉄剣道部の歩みを振り返る貴重な機会ともなりました。

心よりお礼申し上げます。

(かわら版編集WG)

私たちの活動をご紹介します。Ctrlキーを押しながらクリック」でご覧ください。
近鉄剣道部 HP <https://kintetsu-kendobu.wixsite.com/kintetsu-kendo>

伊勢志摩へ 名古屋へ 吉野へ バラエティ豊かな近鉄特急でぜひお越しください



海外事情シリーズ その1

確実に迫ってくる少子高齢化の流れの中で、この素晴らしい伝統文化を次世代に正しく引継いで行くにはどうすれば良いのでしょうか？大阪府剣道連盟では、昨年、原点に戻って対応を模索するプロジェクト(少子高齢化対策連絡会議 略称:SKR)を立ち上げました。様々な切り口の中で、剣道の魅力とは？私たちは何が面白くて剣道をしているのだろうか？といった普段あまり考えたことがないテーマに取り組みました。

その一環として、いろいろ不自由な環境の中で頑張っている「海外から見た日本の剣道」をテーマに原点回帰してみようと、新しい企画を考えてみました。

シリーズその1は、昨年5月にタイから帰国、11月の審査で見事七段に一発合格された辻本徳志さん(株)フコク勤務・クボタ道場所属)から寄稿いただきました。皆さんからの持ち込み企画、大歓迎です！

海外(タイ)からみた剣道体験記

私は、2020年10月から2022年5月までの1年半、東南アジアのタイに企業駐在員として赴任し、仕事の傍ら現地での剣道を経験しましたので、その一部を紹介します。

1. タイの剣道環境のご紹介(組織、稽古場所)

タイの活動組織ですが、国際剣道連盟に所属するタイランド剣道クラブがあります。また、プライベート組織で、日本人会のクラブ活動としてクルンテープ剣友会という組織があります。私のような日本人企業駐在者は、クルンテープ剣友会に所属することになります。両組織合わせると多い時で400人位の剣士が所属していたそうで、東南アジア最大の剣道人口を抱える剣道組織です。

稽古場所はタイ全土に数か所ありますが、最大の稽古場所は首都バンコクの日本人学校の体育館でした。国籍、人種を問わず、子供から大人までたくさんの剣道愛好家が集まり熱心に稽古していました。コロナ感染拡大で学校の体育館が利用できなくなってからは、現地役員のご尽力により、スポーツセンターのダンスルームを確保し、密を避けるために3部制にするなどの工夫をして稽古を行っています(今は、インターナショナルスクールの体育館で稽古ができるようになっています)。

2. タイにおける日本人剣士の役割

我々会員は、日本の伝統文化である剣道を日本人剣士として範を示しながら、自身の稽古に励むだけでなく、タイにおける正しい剣道の普及を目的として、タイランド剣道クラブの活動を全面的に支援しています。各種普及活動、稽古指導、審査会、大会への審査員、審判員の派遣、タイナショナルチームへの監督、役員の派遣など、あらゆる活動に全面的に支援、協力しています。

3. 日本人剣士の役割と稽古環境

現地では、剣道に魅力を感じた多種多様な剣士が、日々、日本の武士道を学ぶべく自

己研鑽に取り組み、有段者から更なる高段位を目指して稽古しています。そしてアセアン大会、世界選手権大会出場での上位入賞を目指しながら、日本人剣士に少しでも近づきたいとの気持ちで熱心に稽古に取り組んでいます。日本で、日本人としか稽古をしたことが無かった私にとっては、これぞ剣道を通じた異文化交流と感動させられる毎日でした。稽古相手は元実業団選手からタイナショナルメンバーもいるため、稽古内容は充実しており、お二人の七段の先生と一緒に元立に立つ機会が多く、指導イコール自身の剣道を高める稽古環境でした。

4. 帰国して感じたこと

5月に帰国してタイと日本で稽古をして感じたことは、日本は稽古場所、そして指導者に恵まれているということです。厳しくも心温かくご指導して頂ける先生方が多くいるという環境は、一歩日本を離れると決して当たり前の環境ではないということに気づかされ、稽古するにあたっては、稽古できる有り難さ、ご指導頂ける有難さに感謝し、素直な気持ちで受け入れられようになり、お陰で11月の名古屋での昇段審査会で七段に合格させていただきました。

私も今回の経験を生かし、海外で活動している仲間のお役に立てればという気持ちで、これからも防具を担いで出向く機会を作っていきたいと思います。

最後にタイ、日本の先生方並びに稽古仲間の皆様に感謝申し上げます。



<タイの剣道仲間との最後の稽古>

地区だより 恒例の3地区合同（豊能、三島、北河内）北地区広域講習会

11月23日高槻市剣道連盟主管、高槻市古曽部防災公園体育館で、新企画「少子高齢化社会を担う指導者の役割と少年指導」をテーマに熱心な取り組みが展開されました。（高槻市剣道連盟 理事 大島安子 記）

新企画模索中

少子高齢化社会における伝統文化の継承を課題に立ち上げたプロジェクト、少子高齢化対策連絡会議（略称：SKR）。会員の皆様方からのアンケートを基に未来構想委員会がまとめた結果、従来の中央講習会の参加資格は五段以上となっていたましたが、実際の指導者の約半数が四段以下であるということがわかりました。

これを受け、3地区合同講習会では従来の固定化された「日本剣道形、審判、指導法」とは異なり、実際に指導（指導補助）に当たっておられる父兄世代の方に「**親と子が一緒になって剣道ができる指導法**」を体験していただく新しい企画に取り組みました。

カリキュラム

10:00 開会

10:10 座学

① 少子高齢化社会における魅力ある剣道とは

② 少年剣道指導にあたって知っておくべきこと

13:00 実技

① 基本動作、木刀による剣道基本技稽古法

② 木刀による剣道基本技稽古法を活用した展開

16:00 合同稽古

17:00 閉会



講師

濱口雅行先生、佐藤誠先生、
吉田一秀先生、三上由美子先生

参加者

87名

午前中は濱口講師による座学

まず剣道のとっかかりとして**遊びの中から**剣道に触れさせて礼の習得へと進み、興味を持たせるうえで**ビギナーパートナー（親）**の役割も重要。

少年（初心者）指導に特化した指導者の育成が喫緊の課題であり、道場の先輩である高校生、大学生を活用した**塾的要素**の新設も！

指導に当たって大切なのは

- ① 見る、見えるということで、**見せる（視覚）→聞かせる（聴覚）→させてみる（体性感覚）→誉める（喜び）**ことが大切（山本五十六より）
- ② 話し方、言葉だけで気持ちや内容が伝わるのは30%、**発声方法**などの配慮が必要
- ③ 「**着装**を見れば**品**が」、「**礼**を見れば**格**が」、「**構え**を見れば**品格**が」、「**初太刀**を見れば**覚悟**がわかる」

午後からは各講師による実技

- 1) 初～四段取得者グループ 三上講師
- 2) 五段取得者グループ 吉田講師
- 3) 六段取得者グループ 佐藤講師
- 4) 錬士、教士グループ 濱口講師

4グループに分かれ、木刀による剣道基本技稽古法から竹刀に変えて防具をつけて「間合い、足さばき、握り、冴えある打突 等」熱心に指導いただき、最後には全員で回り稽古をして終了しました。

今回は四段以下の皆様対象にきめ細かい指導法を講義いただきました。今日からは自信を持って指導に当たれると喜んでいただき、大変有意義な講習会になりました。

『道歌を訪ねて』～シリーズ第五弾～

「道歌」は、道の極意を簡潔に言い表し、七五調で覚えやすいところから「剣道道歌」をシリーズで取り上げてみることにしました。皆さんからの投稿を待っています！

打つ人も打たる人も 諸共に
ただかりそめの 夢の戯れ
神道夢想流杖道道歌より

相手と立ち合った際に、打った打たれたと一喜一憂するのではなく、それはあくまでもその場限りのことであり、勝負に拘泥せず、剣道の理念である人間形成につながるような大きな心を育むように修練することが肝要である、と解釈して選ばせていただきました。

（かわら版編集 WG 北端 浩三）